

Title	On Development from Husserl' s phenomenology : Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring
Author(s)	Hamazu, Shinji
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2018, 58(2), p. 1- 311
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68314
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

あとがき

筆者の研究の出発点は、フッサールの間主観性の現象学だった。九州大学大学院文学研究科博士後期課程を単位取得修了後、ドイツ（当時は西ドイツ）に2年間留学する機会をえた。1年目はケルン大学のウルリッヒ・クレスゲス教授とエリザベート・シュトレーカー教授のもとで、2年目はヴッパータール大学のクラウス・ヘルト教授のもとで学んだ。その時また、フライブルク大学フッサール文庫の助手だったハンス・ライナー・ゼップ氏と、ケルン大学フッサール文庫の助手だったディーター・ローマー氏とも出会うことができた。日本に帰国後、博士論文を『フッサール間主観性の現象学』（創文社、1995年）として出版した。日本語で書かれたものだが、ドイツ語の要旨をつけた。その後、和訳として、クラウス・ヘルト『20世紀の扉を開いた哲学—フッサール現象学入門—』（九州大学出版会、2000年）、フッサール『デカルト的省察』（岩波文庫、2001年）を刊行することができた。

同時に、とりわけ2000年に義父が膀胱がんで余命6ヶ月と告知され、家族として何ができるのかを考えるなかから、「ケア」の問題に取り組むことになった。ターミナル・ケアへの関心から始まったが、その後、実母が脳血管性の認知症、義母がアルツハイマー型の認知症となるなかで、高齢者ケアにも関心が広がって行った。当時、精神科医の方々と「臨床と哲学の研究会」を開催する一方で、非常勤で教えに行っていた看護学校の先生方、筆者の務めていた人文学部の同僚方とともに、「ケアの合同研究会」を開催して、「ケア」の問題への関心が強くなっていった。

2008年に、筆者は、このようにフッサール現象学を専門としながらケア論にも関心をもっているということが評価されて、大阪大学文学研究科の臨床哲学研究室に呼んでいただくことになった。それ以来、大学では、「ケアの臨床哲学—生老病死とそのケア—」という連続講義を続ける一方で、学外では、中之島センターを会場として、専門家と非専門家の両方に開かれた「超高齢社会における〇〇を考える」と題する連続シンポジウムを企画・運営を行ってきた。

その間に、筆者は海外の研究者達とも交流を持って来た。すでに静岡大学時代に、科研費による共同研究によって、チャン・ファイ・チャン（香港）、ナミン・リー（韓国）、リャンカン・ニー（中国）、エルマール・ホーレンシュタイン（スイス）、ダン・ザハヴィ（デンマーク）、アンソニー・スタインボック（米国）、トム・ニーノン（米国）、イヴァン・ブレッヒャ（チェコ）らを招へいしていた。さらに、O.P.O.（世界現象学組織連合）、P.E.A.C.（東

アジア現象学会議)、韓国現象学会、北欧現象学会に参加し研究発表をするなかで、イヴァン・フヴァティク (チェコ)、レスター・エンブリー (米国)、ジャヴィア・サン・マルティン (スペイン)、クォック・イン・ラオ (香港)、マルシア・シューバック (スウェーデン)、サラ・ヘイナマー (フィンランド) といった研究者とも知り合う機会を得た。

2000年から2006年まで、筆者は看護学、リハビリ学、社会福祉学、特別支援教育学、文化人類学、音楽療法学、死生学といった他分野の研究者たちとの学際的・国際的な共同研究で「北欧ケア」の問題に取り組んできた。この共同研究において、北欧諸国にも数回訪れ、カーリン・ダールベリ (スウェーデン)、リサ・フォークマーソン・シェル (スウェーデン)、ヨーナ・タイパレ (フィンランド) といった現象学者たちとも出会うことができ、その共同研究の成果として、『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』(大阪大学出版会)を近刊の予定である。

また、近年、フッサール『間主観性の現象学』全3巻の和訳を山口一郎氏との共監訳で『フッサール間主観性の現象学』全3巻(筑摩書房、2012年・2013年・2015年)を刊行することができた。このような研究と並行して、筆者は、フッサール現象学とケアの臨床哲学との間に橋を架けようとしてきた。そして、この主題に関する研究発表を東アジア現象学会議や北欧現象学会などで行う機会を得ることができる。

2018年3月の定年退職を前に、筆者はこれまでにさまざまな機会に発表してきた論文や発表原稿が散逸してしまわないように集めたいと考えるに至った。研究の初めから今日に至るまで筆者は、日本語だけではなく、英語やドイツ語でも研究を発表してきた。日本語の論文については、上記拙著に収録されなかった論文やその後執筆された論文を集めて、論文集『可能性としてのフッサール現象学—ともに生きるために—』を本書と平行して出版する予定である。それと同様に、英語やドイツ語で書いてきた論文を、このモノグラフ *On Development from Husserl's phenomenology — Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring —* に集めて出版したいと考えた。それぞれの論文と発表の初出については、本書の Postscript を参照されたい。

これまで九州大学、静岡大学、大阪大学と30年を超える研究の期間に学会・研究会その他の機会を通じて筆者を支えてくれたすべての方々に、ここでは紙面の都合で残念ながらすべての人の名前を挙げることはできないが、深い感謝の意を表したい。しかし、少なくとも、静岡大学でドイツ語をチェックしてくれたトーマス・エゲンベルク氏(スイス)、大阪大学で英語をチェックしてくれたマイケル・ギラン・ベキット氏(英国)の2人は、名前を挙げて特別に感謝の意を表したい。そして、最後になったが、このような形でこれらの論文を刊行することを可能にしてくれた大阪大学大学院文学研究科に心より感謝したい。

2018年3月
浜渦 辰二

On Development from Husserl's Phenomenology
— Between Phenomenology of Intersubjectivity
and Clinical Philosophy of Caring —

浜渦 辰二 教授 臨床哲学・倫理学講座
HAMAUZU Shinji

大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編 第58-2巻

2018年(平成30年)3月1日 印刷
2018年(平成30年)3月8日 発行

編集兼 大阪大学大学院文学研究科
発行者 大阪府豊中市待兼山町 1-5